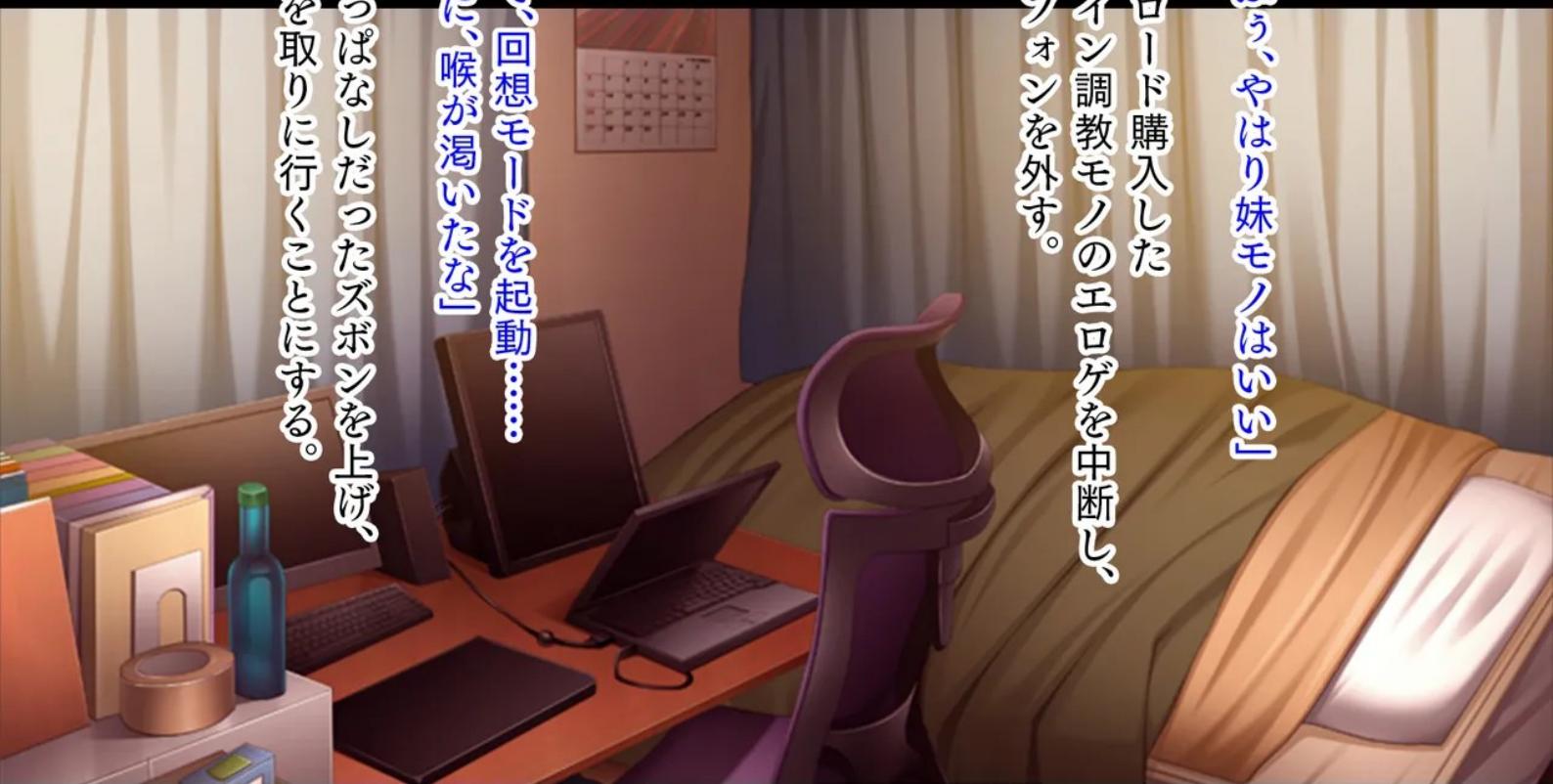


「……ふう、やはり妹モノはいい」

ダウンロード購入した
妹ヒロイン調教モノのエロゲを中断し、
ヘッドフォンを外す。

「さあで、回想モードを起動……
する前に、喉が渴いたな」

下ろしっぱなしだったズボンを上げ、
飲み物を取りに行くことにする。



「んぐっ、んぐっ……ぷはーっ♪ あ、おにーちゃんだ。
ゴハンじゃないのに部屋から出てくるとか珍しくない？」
リビングに入ると、ペットボトルのジュースを
ぐびぐびと飲んでいる妹の緒花がいた。



「喉が渴いたんだ。ちようどいい、ひと口くれよ」

「いーよ、でもひと口だけだからねっ」

「ありがとよ、はむっ！ んぐっ、んぐっ、んぐっ……！」

ペットボトルを受け取ると同時に口をつけて、
一気に飲み干していく。

「おはあー！ ふう、ちそうさん」

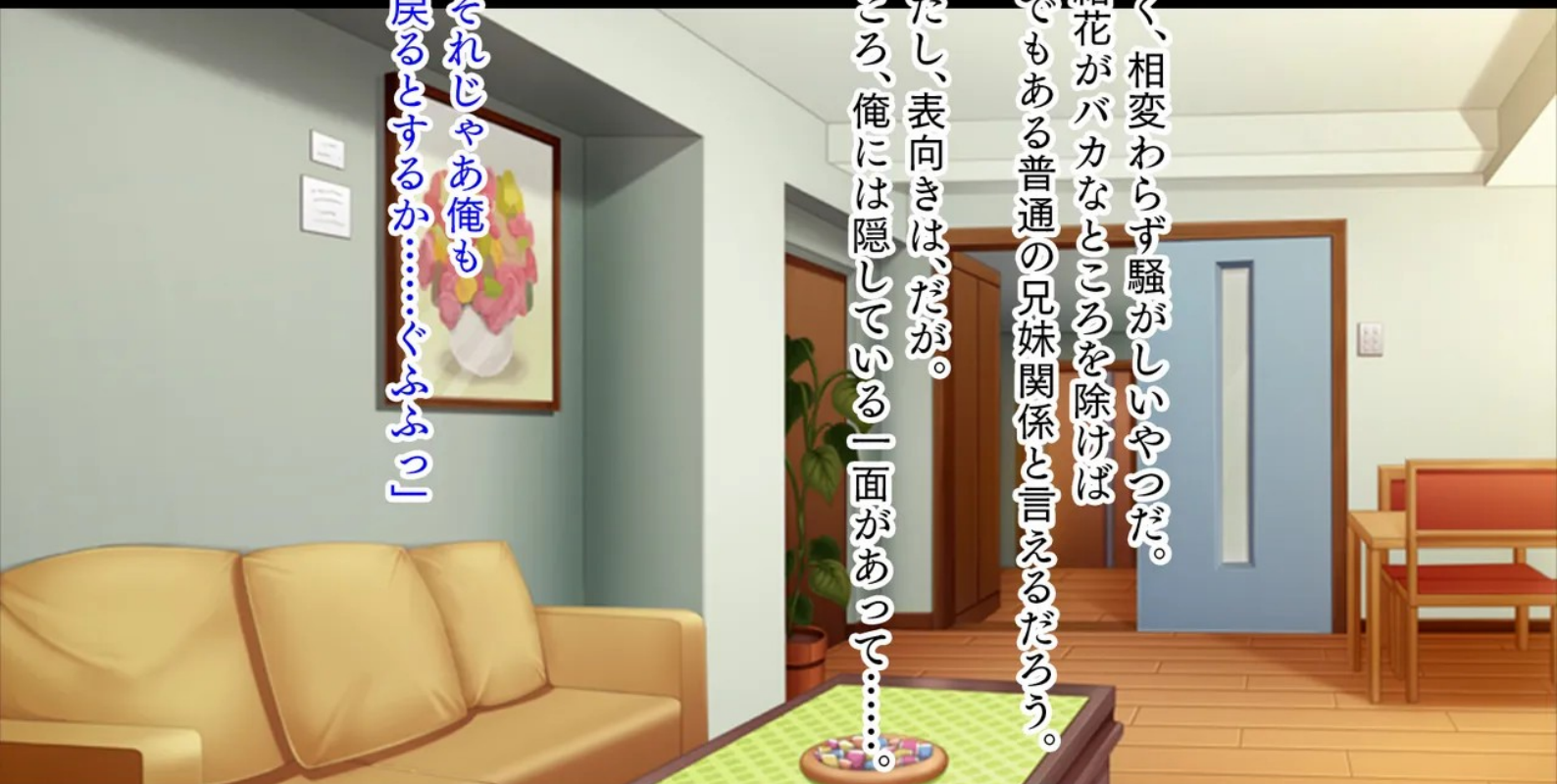
「ごちそうさん、じゃないんだケドっ！
ひと口って言ったじゃんっ！
おにーちゃんのウソつき！」

「そんなもん嘘に決まってるだろ、
少しは学習しろよ」

「うううー……！ おにーちゃんのバカっ！ デブっ！
ヘンタイっ！ もーいい、わたし着替えてくるっ！」

プリンスカと肩を怒らせながら、
緒花がリビングを出ていく。





まったく、相変わらず騒がしいやつだ。
まあ、緒花がバカなところを除けば
どこにでもある普通の兄妹関係と言えるだろう。

……ただし、表向きは、だが。
実のところ、俺には隠している一面があつて……。

「よし、それじゃ俺も
部屋に戻るとするか……ぐふふっ」

早足で部屋まで戻ってきて、*らそらそと*PCへ向かう。

接続してある「受信機器」のスイッチを入れ、
専用のソフトを起動すると――。



——ディスプレイに浮かびあがった、緒花の姿。映っているのは、壁ひとつを挟んだ向こうにある妹の部屋だ。

「おめでとう」

カチカチとマウスを操作して、映像の録画を開始する。あとはヘッドフォンを装着して、と……。



MATUBIN

見での通り、これは盗撮映像だ。

もちろん、こんなことをしている理由はただ一つで……。



「ふいー、ようやく脱げたー……」

「よおし、いいぞお……はあ、はあ」

さっそくとばかりにズボンをずり下ろし、
肉棒を扱っていく。

ぽっ



「寒いからはやくタイツ穿こつと……あれ、どこいった?」

タイツを探すキヨロキヨロとした動きに合わせて、緒花の尻が左右に揺れる。

「ぐふふ、たまらんなあ……はあ、はあ」

ニコニコ

できることなら、この下を見てみたいものなんだが……。



「あ、タイツ見つけー。んー、でもその前に……」

機嫌よくシコつていると、緒花がパンツに手をかけた。
こ、これはまさかっ……!!?



慌てて上体を前のめりにさせて、
ディスプレイに鼻がぶつかる程に顔を近づける。

「うわー、やっぱりベトベトお……
なんか最近オリモノ多いなあー……」

ぽっ



初めて見る妹のアソコに、こっちの興奮もうなぎ登りだ。
まだ遠かったはずの射精感が、グングンせり上がっていく。

「くぅ……！ やばい、そろそろっ……！」

「そだ、新しいのには
ナフキンつけよーつと
……んしょっ」

「くぅっ……！
いくぞっ……！」





「はぁ、はぁ……」

シャワー

MATUBIN

少し目を離している隙に、
緒花は新しいパンツを穿いていた。

「あとはタイツもーつと……
んしょ、んしょ……」



ああっ、くまごみたらし。。。。。



小悪魔になりたい妹に顔射

「たのもー!」

はっ

「おにーちゃんっ、わたし小悪魔ガールになりたいっ!」

「は、はあっ? なんだそりゃ?」



「それでね、おにーちゃんにお願いがあるんだケドっ」

「はあ？　なんだよ？」

「あのね、ダンサーキ見せてっ？
あとポツキとシャサーっ」

「一瞬、何を言われたかわからずポカンとしてしまう。



……しかし、これはまたとないチャンスじゃないか？

「……いいだろう。見せてやってもいいぞ」



「やったっ！ じゃー見せてっ、はやくはやくっ」

「よし、まずはそこに座れ」

俺は椅子ごとその正面に移動し、
ゆっくりとズボンを下ろした。

「おおおーっ、
これがダンサーキッ……」

ふっ

「教科書に絵はあったけど……
うわあし、こーなってるんだー……♪」

その瞳は好奇心でキラキラと輝いており、
まさしく興味津々といった様子だ。



「これがボツキしておつきくなるんだっけ？」

「そうだぞ、それはもう大きくなるんだ」



「見たい見たい！」

「おにーちゃん、ボツキさせてっっ！」

「うー、なんかドキドキしてきたかもっ……
おにーちゃん、まだっ？」

「も、もう少し待てっ」

せめて何か、オカズになるようなものがあれば
……そうだっ！



「よ、よし緒花。ちよつとお前のパンツ貸せ」

「うー……でも、それはそのー
……あうううー……」

かあ

何を恥ずかしがっているのかは知らないが、
待つてらねなら。



「ほら急げ、間に合わなくなるぞっ」

躊躇いを色濃く残したまま、
パジャマのスカート部分に手をつ突っ込む緒花。

「は、はら……でも、あんまり見ないでね……っ」
そっと、小さな布を俺に差し出してきた。



「も、もうっ……あんまり見ないでっつてばあっ……」

「こ、これは……」

まだ温かいパンツの中央に、
カサカサ擦れる生理用ナプキンが鎮座している。

ゆぢや



鼻先が触れそうな近さ嗅ぐたびに、
甘酸っぱい発酵乳製品のようなニオイが抜けていく。

「どれ……レロレロッ」



「ちよっ、なにやってんのっ……!!?
おにーちゃんキモいっ、キモいキモいキモいっ……!」

れろっ
れろっ

「う、うううっ……マジありえないっつてええ……
おにーちゃんの、ヘンタイさ……」

「はあっ、はあっ……」

「レロレロ……たまらんっ……」

抑えつけられていた興奮が
どんどん大きくなっていき……。

れろっ

れろっ



「え、えええつ……!? おにーちゃんつ、
コレなんかいきなりおつきくなつたんだケドつ」

びん

「お、おお！ よし、これが勃起だつ」

「そ、そうなんだつ……うわあ……」

「ぐふふ、いもつとよく見てもらんだぞ」

「う、うん……ええつと、ニオイは……くさっ!？」

「くんくん……うええつ、なにこれ……
ポツキしたダンサーキってこんなにクサいんだ……!？」



「はあ、はあ……よおし、そろそろ触ってみろ」

「えっ!? さ、触るのっ?」
えっ、コレにっ?」

びん

「ああ、いいぞ。好きにやってみろ」

「う、うん……それじゃ、ちよつとだけ……」



「うわあ、なんか熱くてカタいつ……
こんな風になってるんだっ……?」
「は、ははは、まあな……」

ちよつと触られただけで、
自分でも予想以上の快感だった。



「うわあっ、チヨ一動いてるー……♪ おにーちゃん、
もしかしてこれって気持ちいいーってことなの……?」
「あ、ああ、そうだよ」

「へー、ギュッとするだけでも気持ちいいんだー……
えいっ、えいっ……♪」

「緒花、もっと擦るスピードを上げるんだ。
手首のスナップを利かせる感じで、こう、クイクイツと」



「えつと、こんな感じ……？
よつ、ほつ、とりやつ……！」

「お、おおつ……そうだ、
そんな感じでつ……くうつ」

「おーつ、なんかわかってきたかもつ……♪
えいっ、えいえいえいっ……♪」



「うわっ！　なんか先つばから出てきたーっ♪
おにーちゃん、これなにっ？」

「射精が近い目印みたいなのだっ……くうっ」

「そーなのっ？　それじゃ、もうすぐ射精するんだっ？
じゃあもっとしちやおとっ♪　えいえいえいっ♪」

「おおっ、それヤバっ……はあっ、あああっ……！」



本格的に、射精の欲求が高まってくる。



「はあっ、はあっ……！　いくぞ、緒花っ……！
射精、見せてやるからなっ……！」

「うんっ♪　おにーちゃんのシャセーっ、見せてっっっ！」

「あれ、なんか先つぽがプクッてしてきたかもっ♪
おにーちゃん、これってもしかして出そうなのっ？」

「ああっ、もう出るぞっ………！
顔を近づけろっ………！」

「顔？ えーっと、こんな感じっ？」

「くっくっくっ！ 出るっ！」





「うわわっ、なんか出てきたっ……!!
ひゃんっ、なにっ、なにになっ……!!」

「これが、射精だっ……!!
くううっ……!!」

びゅん

!?

びゅん

KAWAYAMA

「なんかあつたかくてお風呂のお湯みたいっ……
んんっ……! すごっつ、まだ出てるっ……!」

「ああっ、まだ出るぞおっ……!」

それはもうたつぷりと、緒花に顔射してやった。





「おおー、チヨーいっばい……えーつと、
シャセーして出てきたからこれがセーエキなんだよね？」
「はあ、はあ……ああ、そうだぞ」

「へえー、そーなんだー……くんくん……
おお、なんかへんなニオイがするー……」

ドロリと垂れる精液の感触に、
緒花がキョトンとした表情を浮かべている。
なんとなくか、純粹に興味津々といった様子だ。



ここまでされて、
嫌がる素振りすら見せないとは……。

もしかして、コイツにはもつと凄いのことをしても
文句を言わないんじゃないか……？

そう思った俺は、妹を小悪魔ガールにすべく
エッチな特訓を開始させる——。

処女の妹と初エッチ

「あ……なんか、ドキドキしてきたかも……えへへ」

「……最後にもう一回だけ確認だが、本当にいいんだな？」

「う、うん……ダイジョーブ、だと思う……」

だんだん緊張が増してきたのか、
緒花がモジモジしながら見つめてくる。

「よおし、じゃあさっそくやろうか」

緒花の意思を再確認したところで、グイッと引き寄せる。



「ひゃんっ……!? お、おにーちゃん……?」
え、ええっ……なににするの……?」

いきなりセックスもいいが、
この小さな唇にむしゃぶりついてやりたい。

「え、ええっ……? でも、

キスって好きな人とだけするものじゃないのっ……?」

兄妹セックスは大丈夫なくせにキスは嫌がるなんて、
相変わらずどこかズレたやつだ。



「うう……おにーちゃん回クサイし、マジでヤなんだケドお……」

まだ完全に踏ん切りはついてないようだが、それでも覚悟だけは決めたようだ。

「ぐふっ……よおし、口開けろ」



「んあっ……!? は、はひひへふぼっ……?」
ふあっ……んっ、んんうーっ……!」

緒花が、プルプルと耐えながら唾液の感触に耐えてゆく。

「よし、こんなもんだろ……もつと口開けてみる」



俺の唾液がたっぷり溜まっていた。
俺の言いつけ通り、しっかりと溜めていたようだ。

「それじゃあ、それを……そうだな、まずは味わってみろ」

「ん……ネチヨ、グチュ……レロ、ニユブ……」

「どうだ、美味しいか？」



「うえー……おにーちゃんのヨダレ、
飲んじゃったしー……気持ちわるい……」

「ぐふふっ……よし、

じゃあ次は実際にやってみるぞ。背伸びしてペロ伸ばせ」

「うう、やんなきゃダメなんだよね……んあ……」

緒花が、その小さな舌を伸ばしながらクイツと背伸びする。



「んんっ……!? おにーひゃっ、んんっ……
ベロ、当たっへるんらけるっ……!」

「気持ちよくしてやるから大人しくしてろ……」

「んはっ……こんなのれ、気持ちよくなんへっ……
れる、んふうっ……」

逃げようとする緒花の舌を絡めとってらぶ。



「んんっ……ふはあっ、なに、これえ……
れろ、ちゅ……なんか、変っ……」

「どうだ、気持ちいいだろう？ れろ、ちゅば」

「れりゅ、ちゅっ……わかんないけおっ……
ペロがくすぐったくて、ゾクゾクするっ……ちゅるっ」

スツと、緒花の尻へと手を伸ばす。



緒花の小さな舌と唾液を味わいながら、
その尻をムニユムニユと揉みしだいていく。

「ふあっ、ああっ……おにーひゃん、
おひり、さわりしゅぎいっ……ふあっ、んむっ……」

あーい

あーい



キスと愛撫を夢中で続けていると――。

「んんむうっ!! れろっ、ちゆるっ……
おはっ、ふあっ、あっ……れろれる、ちゆるりゅっ……」

あい

あい



ぐわい

ぐわい

ぐわい

ぐわい

「ふあっ、あああああっ……!!?」



「ふああっ……!?!」

「ぐふふっ、たまらんなあっ……れろ、れろれろっ!」

がしゅっ

がしゅっ

「おにーひゃっ、いまはっ、らめえっ……
れろ、ちゅぱっ……んふうあっ、ふあああっ……!」

これだけ準備が整えば、もういっただろっ。

「ふはあつ……!! はあ、はあ……
なに、いまのお……頭のなか真っ白になった……!」

「なんだ、まだイッたことなかったのか?」

「イク……? 今のが、イクってゆーやつなの……?」



「はあ、はあ……おにーちゃん……わたし、
なんかアソコがムズムズする……これって、
イッたからなの……？」

「よし、今から俺が言う通りのポーズを取れよ」

緒花に指示を細かく出し、
俺はビデオカメラの電源を入れた。



「えへへへ……ぴーすっ♪」

「ぶよーし……まずは自己紹介してみろ」

ドサッ



「自己紹介？」

えーっと、吾妹緒花です♪

「シユミはカラオケで、特技はとくにありませんっ♪」

「えーつとー……今日は、わたしのヴァージンを
おにーちゃんにプレゼントしまーすっ♪」

「このカメラは記念撮影らしくてー、
わたしがおにーちゃんとエッチして
処女を卒業するところを
パッチリ残すためにやってまーす♪」

「じゃあ、これから兄妹セックスを撮影するようないけないワレメちゃんを確認させてもらおうかな？」



「えへへ……ヤバい、なんかチョーハズい……♪」
「お、おお……素晴らしいっ……!」

まともな毛が一本も生えていない見事なツルツル具合だ。
これが、妹の処女ワレメ。

くぱあ



「ってゆーか、はやくしよー……?」
「なんか、この体勢疲れてきちゃったんだケドー……」

「あ、ああ……そうだな」



「そうだ、今回の目的は
緒花のアソコを撮影することじゃない。
俺は今から、もっといいものを貰うんだ。」

さあ、挿れるぞっ……!!

「……チツ。すまん、忘れてた」

「おにーちゃん、コンドームは……? つけないと赤ちゃんできちゃうよー……?」



ちと

ちと

超薄タイプのコンドームを装着する。

「……これでよし。それじゃ、改めていくぞ?」

「うんうん……はい……」

緒花が、処女ワレメに挿れやすいようにと腰を軽く上げる。
そこに亀頭の先端をクチュリと当てて、
そのままググッと腰に力を入れていき――。



「あぐらっ!? んんっ、くぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……!」

「くおおっ!? キ、キツイっ……!」



「ブチッと何かを破ったような感触の瞬間、肉棒が押し潰されそうなほどの膣圧に襲われる。」

「ん、うううううっ……!!
ぜんぶっ、入ったのおっ……?」

「さ、さ、まだだ」

力づくでメリメリとこじ開けるような感じで、
緒花の無毛ワレメに肉棒を埋めていく。



「くぅぅぅ……!? い、痛い、らららら……
んんん、くっ、ふうんううう……!」

「はあ、はあ……は、入った……」

「んっ、くぅぅ……
ぜ、ぜんぶっ……入ったのっ……?」

「ああ、入ったぞ……あ、ああ……
よおし……動くぞっ……」

ずぶずぶ!!

めめ
= =





「はあっ、ああっ……あ、あれっ……？
痛い、んだけど……んうっ……なんか……あっ、あっ……」

「はあっ……あっ、ああっ……おにー、ちゃあんっ……
なんか、わたしっ……アソコ、おかしーかもっ……」

△
ぶっ
ッ

△
ぶっ
う

「まさか、もう感じてるのか?」

「わかんないけどっ……ふあっ……ヒリヒリするのよ、ソクソクも、しててっ……あっ、あっ……」

「なに、これえっ……ふあっ、ああっ……へんな声、出ちゃううっ……はあっ、ああっ……」





「おにー、ちゃあんっ……んあっ！
わたしっ、これダメかもおっ……んはあっ……！」

「こんなの、ゼツタイどっかへんになるうっ……
あっ、ああっ……！」

「おにーちゃんのっ、ビクビクしてるうっ……
これっ、気持ちいいっ、あっ、あああっ……！」

ズシッ！
ズシッ！
ズシッ！

あ

「ぎゃあんっ!! やあっ、なにこれえっ!
ああんっ、ああっ、あああんっ、ああああんっ!!」
「へっへっ!!? 締まるっ!!」

「これっ、マジでっ、ヤバイっでえっ!
おにーちゃんのがズンッて響いてっ、
頭、バカになっっちゃうっ!!」



ズンッ
ズンッ
ズンッ



「ああんっ！ きゃんっ！ ああんっ！
ひゃんっ！ ひはああっ、ああああんっ！」

「ああんっ！ もう、ダメエツ！
きゃんっ、あはあんっ！
わたしっ、またっ、きてるうっ！
ヤバイくらいおっきーのきちちゃってるうっ！」

「ああっ、イクっ、イクっ、イクううううっ！！
あっ、ああああああああああああっ……！！」

ズッ
ほっ
ほっ
ほっ



ああああ

「あああああああああああああああつ……!!!」

ピクッ

ピクッ

グッ

グッ

グッ



「おにーちゃんのこと、奥でビクビクしてるううっ……!!
それっ、きもちいつ、あっ、あああああっ……!!」
「ぐうぐうっ……たまるんっ……!!」

んんん!

んんん!

んんん!

こんなの、「一回だけじゃ終わらせられない……!!」

「続けていくぞ、緒花っ」

……そうして、夢中で緒花とセックスをしまくり。
ふと気づいた頃には、すでに外は暗くなっていた。



「はあー……はあー……えへへ、
いえーい……♪ 処女、卒業したよー……♪」

「緒花、初セックスの感想を言ってみろ」

「おはい」

「おはい」

「えーつとお……はあ、はあ……
おにーちゃんがすごすぎて、
よくわかんなかったあ……♪」



「なんだ、気持ちよくなかったのか？」

「もし、気持ちよかったに決まってるじゃーん……♪
こんなの、ハマっちゃうかもって思ったよお……♪」

「これから毎日い……」

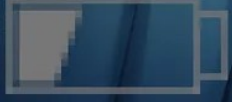
「おにーちゃんと兄妹セックス、頑張りまあーす……♪」

「これは、本当にハマったようだな。」



REC

ぐふふっ、処女じゃなくなったし
これでエッチの特訓を始められるな。
頑張ろうなあ緒花。



夜中に妹とチアコスで特訓

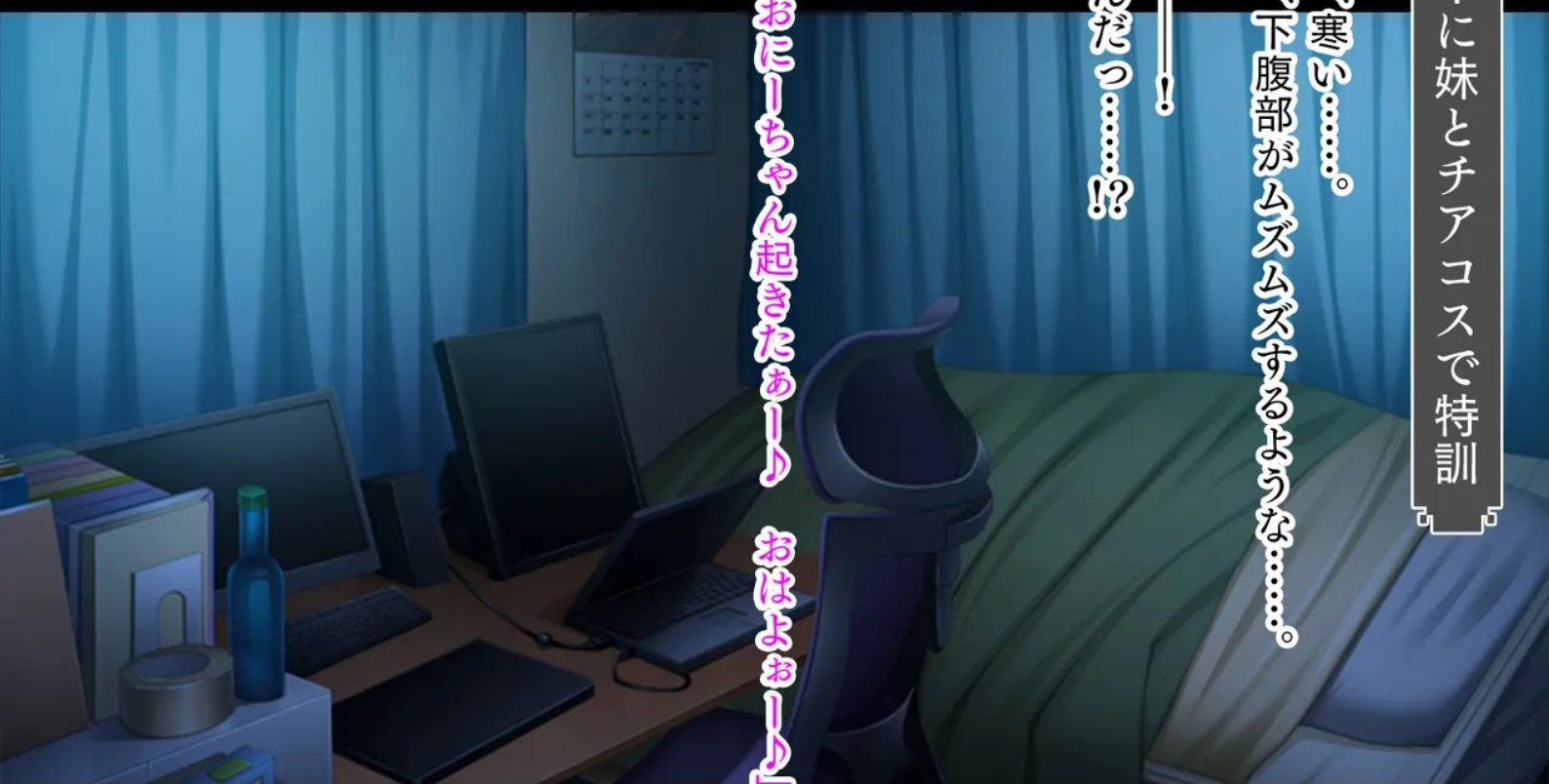
なんか、寒い……。

それに、下腹部がムズムズするような……。

ズシッ——！

な、なんだっ……!!?

「あー、おにーちゃん起きたあー」 おはよおー





「お、おいつ……お前、何やってんだっ？」

「えー、なあーにがあー？」

「ねえー、エッチのトククンしよおーよおー♪
エッチしよおーよおー、ほらほらあー♪」

ヌルヌルッと、緒花がアソコを俺のモノに押しつけてくる。
……この感触、まさかコイツ穿いてない？

「というか、なんなんだよその格好は……」



「だって、オトコの人ってこーゆーの好きなんでしょおー？
学校でも、みーんなエッチな目で見てくるしいー♪」

「この格好でエッチさせたげるからあー、
トククンしよおー？」

「あ、あ、あ」

「勃起しそうにないから無理だ……
というか寝かせる」

「ふーん……じゃあ、ポツキさせちゃうもんねえー♪」

くは くは



「んふふー♪ こーやって、おっぱい見せながらあー……
こうだーっ♪」

「えいつ、えいつ……♪
おつきくなーれ、おつきくなーれ……♪」

緒花が身体を揺らすたび、
愚息にニユルニユルと愛液が絡みついてくる。
コイツ、もうかなり濡れてるようだ。

おっぱい

始ちや...

wut



「んふふー……♪
ちよつとずつおつきくなつてきたー……♪
ほら、もつともつとおー……♪ えい、えーい……♪」

「ポッキ、ポッキー……♪
はやくっ、はーや〜ー……♪」

「ぐ〜っ……なげなまら……♪」

♪♪

「んー、あんまりおつきくケド……
ま、コレでいっかー」

3/31

緒花のやつは
中途半端に少しだけ固くなったモノを膣口に当てがい、
そのまま腰を落としてきて――。





「あはあああつ……♪
おにーちゃんの、きたああ……♪」

わっ

「はああ……♪」

「おにーちゃんの、熱くて気持ちさ……♪」

わっ

ALP



「それじゃあー……せつかくこの格好してるしらー、
応援したげるねえー……♪」

「ボッキつ、ボッキつ、ボッキしてり……
わたしのアソコで、シャセーしてり……♪」

ぬ
ぶ
ぬ
ぶ

愛液まみれの膣肉が、
半勃起の肉棒をヌルヌルと扱ってくる。

「あはあぁっ……………」おにーちゃんの、
ちよつとずつおつきくなつてきたぁ……………」

「アソコ、パンパンに広がっちゃったぁ……………」
ねえおにーちゃん、このままエッチしていい……………？
ってゆーかしちゃうねえ……………」

「お、おらっ」





「あつ、あつ、あつ……おにーちゃんのこと、擦れるうっ……! あつ、あああんっ……!」

「気持ち、いーよおっ……あんっ、ああんっ……!」

奥っ、ズンズンっで届いてるうっ……あつ、あはあつ……!」

「ちよつとストップアツ……くううっ」

「これスキっ、ここスキなのおっ……」

あんっ、ああんっ……! 奥っ、感じちやううっ……!」

「くはっ……やばっ……！」

「あんっ、ああっ……おにーちゃんの、
気持ちいーよおっ……はあっ、あんっ、ああっ……！」

「くっくっ……こうなったら、俺も動くぞっ！」

弾んでいる緒花の動きに合わせて、下から突き上げていく。



「いいっ、気持ちいいのおっ！ あんっ、あああんっ！
おにーちゃんのが突き刺さってっ、
感じちゃってるのおっ！」

「くはっ!? めちゃくちゃ締めさるっ……っ！」

「もっとおっ、もっとしてえっ！
もっとおっ、おにーちゃんペニスでズンズンしてえっ！」

「ああ、ちゅちゅもじゅやるよっ！」





「ああんっ！ それっ、ヤバっ、ヤバいいっ！
わたひのアソコっ、ビクビクッてイツちやううっ！」

「ひああああんっ!? らめっ、らめえっ！
こんなに激しーのっ、子宮が喜んじやううっ！
おにーちゃんザーメンっ、ほしくなっちやうからあっ！」

あ...
あ...
あ...

緒花の絶頂に合わせて、思いつきり子種を解き放つてやる。

「あはああつ！ きてりゆつ、きてりゆつ！
おにーひゃんザーメシつ、ビュービューつで当たつてつ、
イツてりゆうつ！ あつ、あああああつ！」

おあつ

「くっくっくっ、搾り取られるの………」





「はぁーっ……はぁーっ……♪
おにーちゃんので、お腹いっぱい……♪」

おにー

はぁー

「ねえ、おにーちゃん……まだ、できるでしょおー……？」

「わたし、まだ足りないよおー……」

「もっかい……ううん、もっからっばらっよおー……♪」

「ほらあ、またおつききくなってきたー……♪
ね、もつとしよお……？ わたしのアソコお、
おにーちゃんのザーメンもつとほしがつてるよおー……」

(3/3)

「くぅっ……こうなったら、やけだっ！」

ここまで求められては黙ってはられない。だってそのこと、
とことんまで付き合っつてやるうじやならかー！





休憩がてら怒張を抜くことすら許されず、
ただひたすらに緒花とセックスを続けて……。
緒花が満足した頃には、
もうすぐ明け方という時間になってしまっていた。

妹と校舎裏でセックス

「ふんふんおっひい……はやくっひい」

腕を引かれるまま、やってきたのは、学校の敷地内だ。
誰も使っていない裏門から入り、
校舎裏まで連れてこられた。

「おにーちやあん……ここなら、誰もこないよお……？」

しゃがんで、緒花のすぐ正面に跪く。

すると、緒花はゆっくりとスカートを上げていき……。



「はあ、はあ……見て、おにーちゃん……
わたし、こんなになっちゃったあー……♪」

「おいおい、
こんなに濡らしてるのかよ？」

「うん……♪ 教室でもずーっと濡れちゃってで
掃除中とかチョータイヘンだった……♪」

ばっ
っ



「ねえ、おにーちゃん……
これ、どーにかしてえー……?」

16歳

16歳

「ああ、いそぞ……ぐふふっ」

緒花のアソコに顔を近づける。



「マロロ……マロロ……マロロ……」

は

「あんっ……♪
それ、イイっ……はあっ、ああっ……♪」

「あっ、あっ……♪
サイコーおっ……んっ……あっ……ああっ……♪」





「緒花、お前が自分で触ってみろよ」

「んっ、あっ……あんっ……♪ はあ、はあ……ねー、
おにーちゃん……クリトリス、舐めてえ……？」

フム
フム

「んー、しよーがないなあ……♪
それじゃ、ちよつとだけだよお……っ」



緒花はあっさりと了承する。
そして、スカートを持ってない方の手を動かして……。

「んんっ……！ うわぁ……わたしのクリトリス、
チョー大きくなってる……」

そのまま、恐る恐るといった感じでスリスリと擦りだす。

「んんっ……たぶん、こんな感じだよね……はぁ、あつ……」





「思ったより気持ちいい、かもっ……はあ、はあ……
おにーちゃんど、いっぱいトクンしたからかなっ……っ？」

「よおし、特訓の成果だと思ってしっかり見せてみる」

「うんっ……はあっ、あっ……んっ、あっ……っ！」

「あつ、あつ……この触り方、
気持ちいい……んんっ、はあつ、ああつ……」

「ここ、学校なのにつ……オナニーしながら、
気持ちよくなっちゃってるうっ……」

「本当に、すっかり
エロくなつたなあ緒花は」

「見ているだけにしようかと思っていたが、
もう我慢の限界だ。
たっぷり溢れる濃厚な蜜に、舌を伸ばしてやる。」



俺の舌が触れた瞬間、緒花の腰が大きく跳ねた。

「あんっ、あはあっ……ダメ、だってばあっ……！
オナニーしてるときに舐めるなんて、
感じすぎちゃううっ……あん、ひあんっ……！」

「いいぞ、もっと感じてみろっ」

「あんっ、あっ……マジでっ、
こんなのダメだってばあっ……あっ、あんっ……
これじゃっ……すぐ、ぎちゃううっ……！」



疼いていたこともあつてか、
早くも高まつてきているようだ。

「ぐふふっ、ここも可愛がつてやううっー!」

「ひゃんっ……!!? やっ、おしっこの穴、
なんか動いてるうっ……!!? あっ、ああああっ……!!」

突出しているストロー部分を、
強めにグリグリと舐めていく。





「なにっ、これえっ……おしっこの穴、
ソクソクしてるうっ……! あんっ、ああんっ……!」

「もうダメえっ……! おにーちゃんに、
おしっこの穴イジメられながらあつ……!
イツちやううううううっ……!」

じゅぽ

ちゅぽ

じゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ



「あああああああああああああああああああああつ……!」

びしょびしょ

ピリッ!

ピリッ!

ピリッ
ピリッ

ピリッピリッ!

尿道口へと繋がる突起を刺激してやると、
すぐにまた潮が噴出してくる。



「あつ、あああつ……！
なんか、出てるうっ……！」

「あつ、あああつ……！
なに、これえつ……！
気持ち、いらら……！
あつ、あああああつ……！」

おあつ

「ひあんっ……!! ダ、ダメえっ……!!
イッてるのにつ、そんなにされたらっ……
おしっこ、出ちゃうっ……!!」

おきっ

ほっ

「555ぞ、このまま飲んでやるっ!
レロッ、レロレロッ!」

いきなり緒花の身体からフツと力が抜けて……。





「あ、あああ……ホントに出ちゃったあ……」

やっ

は

ジュウ
ジュウジュウ

ぱぱぱ……

「おにーちゃんに飲まれちゃってるのに、
止まらないよお……」 ああ、はあああ……」



「美味しいぞ、緒花あつ……んぐりぐりぐりぐり」

「……よし、壁に手をつけて尻を向けろ」

たばぽぽぽ……

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

「はあ、はあ……ねえおにーちやあん、挿れてえ……?」

16-9

16-9

はあ…

「はあのかよ、学校だぞ?」



「だってえ、ここまでしたの、おにーちゃんだよお……？
ちゃあんど、責任とってトクンしてえ……？」

「いいぞ、挿れてやろうじゃないか」

「うんっ……きてえー……っ」

ズイッと、緒花が尻をもつと突き出してくる。
俺はスポンをずり下ろしながら、その尻に近づき――。





「あ、あああつ……
熱いの、きたあつ……」

ふにゅあつ

は

「んっ、あはあっ……いいっ……太いの、
いっぱい動いてるうっ……あんっ、ああっ……♪」

「おいっ、あまり声をあげるなよっ？」

「そんなのっ、ムリだよおっ……あんっ、あはあっ……
だっつ、気持ちいいんだもおんっ……ああんっ……♪」



「おにーちやあんつ……もつと強いのでえつ……？
あんつ、ああんつ……こんなゆっくりだと、
物足りないよおつ……んはあんつ……♪」

やっ

「少し待で。……おお、これは」

鞆の中に入っていたのは、3本のアナルバイブだ。
ちようどいい、これを使ってやるか。

あ



「ひあうっ……!? やっ……な、なにっ……?」

「寂しそうだっただんでなあ。こつちも好きだらう?」

わっ

あ



「あうっ、ああっ……なに、これえっ……
はあっ、ああっ……わたしっ、
こんなの知らないっ……ああっ……！」

「大丈夫、慣れればすぐによくなる」

「そんなこと、言われてもおっ……
ふあっ、ああっ……だめえっ、なんか、
ムズムズくるうっ……あああっ……！」



「これ、ヤバいつ、かもおつ……♪
なんかっ、チョー感じてきてるうっ……♪」

「お尻とアツコ、いっしょに入ってるのっ……
気持ち、いいっ……ふあぁっ……♪」

「よおし、だったら追加だっ」



「あつ、あああああーっ……!!」

やっ

んっ

「よし、このまま激しくいくぞっ！」

「ひあああんっ……!!」
「待ってっ、これヤバいらっ……!!」



速く大きなストロークと交互に、
アナルバイブたちも抜き差ししていく。

「ひあああんっ……!! お尻とアソコっ、
いっしょにズブズブされるの気持ちいいーよおっ……!!」



「それっ、それしゅごいらっ！
ああんっ、ひゃああんっ、きゃああんっ！
頭のなかつ、真っ白になるうっ！」

「おにーちゃんもきてっ、出してえっ！
学校でっ、中出しでっ、イカせてええっ！」

「くっくっくっ！ じくぞっ！ 出すぞっ！」



「あああああああああああああああああああああああああああああつ!!」

おあおあ!

ピクッ

ピクッ

びゅー
—
い

びゅー
い

びゅー
い

「くばあああああつ!」



「あ、あああああつ……!!
これっ、ヤバっ、ヤバいつてえええつ……!!」

おまっ

ズレ
ズレ

ズレ

ズレ
ズレ
ズレ

ズレ

ズレ
ズレ
ズレ

「あああつ、ふああああつ……!!」

中出しされながらっ、お尻っ、感じちやうううっ……!!」

緒花のやつは絶頂が長引いているようで、
ガクガクとした痙攣は止まらない。

「ばあ、はあ……また、いっぱい出たねー……」

16歳

16歳

トキトキ

「どうだ、満足したか？」





ウツトリとした様子で微笑みながら、頷く緒花。

そのエロい表情に、出したばかりの肉棒が
ピクリと反応してしまいそうになるが……。

さすがにここでこれ以上の行為はまずいと思い直し、
俺は鞆からティッシュを取りだすのだった。

電話中の妹とセックス

「何を悩んでるんだよ」

「実は今日、クラスの男子にコクられちゃって……」

「わたし、コクられたのなんて初めてだし……
もう、どーすればいいーかわかんなくて……」

言いながらまた悩んできたのか、緒花がしゅんと落ち込む。



「……そうだな、一度OKして付き合っつてしまえ。
そして頃合いを見て別れる」

「でも……それって、なんかビドくない……?」

「おいおい、小悪魔ガールになりたいんだらう?」

「何人もの男を手玉に取れるくらいじゃなくてどうするの?」

「あ、そつか……そうだよね、

じゃあわたし、オツケーのメール送っちゃうね……?」

「ああ、それがいい……いや、ちよつと待て

メールじゃなくて——電話で返事をしよう」





「あ、もしもしー？ えっと、こんな時間にゴメンねー？
うん、まだ起きてたー？」

そして俺は、そんな声を聞きながら
緒花の尻に手を伸ばした。

「ぐふふ……」

ぐい

モニユモニユと柔らかな尻肉をこね回しながら、同時に肉棒も押し当ててやる。

「あ、うん……それで、あのー……ほら、今日カラオケでコクつてくれたでしょー……？」

「……おっと」



「うん、それでね……その返事をしようと思って……
聞いて、くれる……っ」

あめぐりっりちもそらぐり……。

「ええつと……わたしなんかでよければ、
その……カノジョになってあげても、いーよ……？
うん、だからその……わたしと、付き合ってください——」

さわ

ぶにっ
ぶにっ





「……」

ずぶずぶ!!

ズブズブ、と緒花の膣内に肉棒を埋めていく。

「……はっ……」

「……!!」

様子を見ながら、ゆっくりと腰を動かしていく。

「はあ、はあ……あ、でもその前にちよつとだけいい……？
恋人になるには、条件があるんだケド……んうっ」

「あのね、わたしのお家、チョー厳しーからっ
……エツチなコトとか、ダメなんだー……」

……そう、これが俺が決めてやった条件だ。





そうかそうか、受け入れたか。

「……」

「そっか、よかったー……♪
んうっ……これで、今度からは恋人同士だねー……♪」

わっ

はっ



「おにーちゃん、だめっ……」

「おにーちゃん、だめっ……」

「んんん……！ そんなっ、激しっ……」

おにーちゃん

おにーちゃん

んんん

おにーちゃん



「……もーっ、そーゆーのじゃっ、なっらってえっ……」

「ちよっつとっ、そのっ……んんんううっ……！
ストレッチっ、してるっ、ただだからっ……！」



「マジでっ、ストレッチっ、だよっ……!?
身体、カタイからっ……んんうっ……!」

「はあっ、はあっ……よおし、このまま中出しだっ……!」

「ひうっ、んんううっ……！
だいじょーぶっ……んんううっ……！」

「ちよつとっ、ヘンなところっ、
つつちやっただけっ、だからあっ……！」

びりるるるっ！

てんてん

びんびん

んうう！

俺に中出しをされながら、必死に誤魔化す緒花。



「んうっ……♪ はあ、はあ……うん、つつたの、
治った……♪ んんっ……うん、ありがとー……♪」

「はあ、はあ……
え、こつちの声つけてけっこう途切れてたの……？
なんだ、そーだったんだあ……♪」


どろ……

どろ……

おは……

ホッと、緒花がその身体から力を抜く。

おは……



なるほど、音声が途切れ気味&ストレッチ
という説明を受けてそれを信じている感じか？

もちろん本当のところはわからんが、まあどうでもいい。
事実がどうだろうと、俺は緒花に生ハメ中出しするだけだ。

クスコを使った内診エッチ

そしてある日のこと……。

「ただいまー」

「よお、遅かったじゃないか」

「ごめーん、マサユキさんと話してたら遅くなっちゃった」
「なんだよ、またか？ よくもまあ話題が尽きないもんだ」



ここ最近、すっかりお決まりになったやり取りをする。

「まあはい、さっそくいつものやるぞ」

「はい……んしよつと」



慣れたもので、緒花がササッと制服を脱いでいく。
裸になった緒花を、前から後ろからジロジロと眺めていく。

「今日も、彼氏とは何もしなかったようだな」

「もし、そんなの当たり前じゃーん。
毎日チェックするほどのことでもなくなーい？」

「いやいや、大事なことなんだよ。」

さて、身体の外は大丈夫そうだし……次は、中だな」



「はーはー」

慣れた様子で、緒花がテーブルの上に乗る。
さて、こっちもビデオカメラのセッティングだ。

「よしよしとー……はら、どーぞりん」

これからするのは、俺と緒花にとっての日課。
彼氏くんとエロいことをしていないか膣内の確認だ。

「ふむふむ、誰かに触られた形跡はないな……
くんくん……うむ、匂いもいつも通りだ」



「もー、だからそー言ってるじゃーん。はやく終わらせて、
トックンしよーよー……ん」

「ぐふふっ、そうするかな」

手元に置いてある袋から、ゴソゴソとクスコを取りだす。
その先端を、緒花の膣口にそっと当てて……。



「んんっ……ちゃんと入った……？」

ずっ…

ずっ…

「ぐふふっ、相変わらず綺麗なピンク色だなあ」

「んふふー……♪ だって、マジでおにーちゃんとしか
エッチなコトしてないもーん……♪」



「奥まで、いっぱい確認してえ……?」

「ぐふふっ、それじゃあ奥まで確認させてもらうかな」



再び、袋をゴソゴソと漁る。

よしよし、あったぞお……。

「ああ、ジッとしてらよ……?」

「あれっ……？」

「おにーちゃん、ソレなにしてるのー……？」

「いや、気にするな……ちゃんと、

中まで確認してるだけだ……はあ、はあ……」

生返事をしながら、意識はスマホ画面に集中している。
これは、スマホ接続対応のケーブル型スコープレンズ。



「ねえ、おにーちゃん……それって、
もしかしてわたしの奥まで見えちゃってるの……？」
「ぐふふっ、そうだぞ。丸見えだ」

ふふっ

「うっそ、マジでーっ……♪ ヤバーいつ、
なんかチヨーハズくなってきたんだケドーっ……♪」



「濡れ濡れじゃないか。そんなに生ハメがほしいのか？」

「だってえ……んっ、はあ……見られてるって思うと、アソコがチョームズムズするんだもおん……♪」

「ぐふふっ、仕方ないやつだな
じゃあ、いつものやるぞ。今日はこのままで」

「はーS……♪」



「緒花でーす……♪ 同じクラスにカレシいます……♪
カレシとは、まだキスもしてないでーす……♪」
「カレシにはゼツタイに触らせてあげないアソコなら、
今からおにーちゃんの
濃厚ザーメンを出してもらいます……♪」

「緒花の子宮がザーメンでいっぱいになるところ、
ゆーっくり見てくださあーい……♪」



「はい、ぜんぶ言ったよおー……？
おにーちゃん、はやくうー……♪」

「ぐふふっ！ よおし、始めるかつ」

もど

もど

スマホを片付け、
クスコを引き抜いて、緒花の正面に立つ。





「あはあああつ……♪
おにーちゃんのぶつといペニス、きたあああつ……♪」

「おおっ、相変わらずキツキツだなっ！
よおし、動くぞっ？」

ほっ

ジジジ!

ズッ

ムヒッ

「はあっ、ああんっ……おにーちやあん、
もっとな動いてえっ……？」

「こんなゆつくりじゃなくてえっ……
おもいつきりしてえっ……？」

「なんだ、そんなに激しいのがほしいのか？」



はっ

「いんなのじゃ物足りないからっ、
もっとイジメてほしいのおっ……っ」

「まったく、仕方のないエロ妹だなお前は」

あ

「だって、エッチ大好きだもおんっ……ひあんっ、
んはあっ……だからあ、もっとすっごいのきてえっ……っ」

「よおし、じゃあ激しいのいくぞっー」



「ひああああんっ……!? これっ、これえっ……!
これがつ、ほしかったのおっ……!」

「相変わらず凄い濡れっぶりだなっ!
そんなに兄妹セックスが気持ちいいのかっ!」

「いいっ、いいのおっ……! あんっ、ぎゃあんっ……!
兄妹セックスっ、気持ちいいっ……!」



「俺だけじゃなくて、カメラに向かって言ってみろっ！」

「おにーちゃんとの生ハメセックスつ、サイコーに感じてますううっ……！」

「よおし、ちゃんと言えたご褒美——だっ！」

「ひあああんっ……!!? これっ、深いっ……! あんっ、きやあんっ、あはああんっ……!!」



「よおしっ、そろそろ出すぞっ！
どっかに出してほしいか言ってみろっ！」

あ、

「中っ、中がいいのおっ！ あんっ、ああんっ！
おクスリで赤ちゃんできないアソコにいつ、
中出しザーメンいつばいきてえっ！」

やっ

んっ

「彼氏持ちのくせに、そんなに中出しがほしいのかっ！」



鋭敏になった亀頭の先端に、
何かがチュウチュウと吸い付いてきているような
感触が走っていく。
しばらくの間、俺は出し続けてしまうのだった。



びしょびしょ!


びしょびしょ

「はぁー……はぁー……おにーちゃん、見えてるー……?」

「お、おお……バッチリ見えてるぞ……!」

楽しむ前にも確認した、緒花の子宮口——。
そこに、大量の白濁粘液がネットリと絡みついている。





妹に中出しして、子宮口を兄ザーメンでドロドロにして。
その映像を、兄妹で並んで鑑賞するというのも悪くない。
そんな未来を想像しながら、
俺はニタニタとした笑みが
止まらなくなってしまうのだった。

映画館で彼氏の隣りでエッチ

翌日の昼過ぎ。

俺は、家のある町から電車で15分ほどの距離にあるとある駅の改札前にいた。もちろん、ここが待ち合わせ場所だからだ。

緒花はすでに待っていて、

先ほどからどこかソワソワと周囲を見回している。

あとは、彼氏くんがくるのを待つだけだが……。



「お……？」

緒花と同じくらい若い男が、タタタツと緒花に駆け寄る。
あいつが彼氏のマサユキくんなのか、
なかなかの爽やかイケメンじゃないか。

そんな彼氏くんを見ながら、緒花はニコニコと笑顔。
……やはり、それなりに仲がいいようだな。

「おっと……」

緒花たちが歩きだしたのを確認して、
俺もその場を移動する。

さあ、ここからはもう少し近づいてみるか……。



「そ、その……今日は、どこ行くの？」

「えっとねー、

面白そーな映画があったからそれ観たいなーって
思ってるんだー」

「そうなんだ……なんて映画？」

「んーっと……あれ、なんだっけ？ なんとかーってやつ」

「あ、あはは……なんていうか、吾妹さんらしいね」

「えへへー、そっかなー？」



「そ、その……そういうところが、
か……いい……っていうか……」

まさに初々しいカップルという感じで、周囲を歩く
大人たちからも微笑ましそうに眺められている。

「……ん」

まあいい、どうせ彼氏くんとの関係は形だけのものだ。
彼氏くんは尾行がバレないよう後をつけていき……。

「おおし、ガラガラだねー！　こんなの初めて見たっ♪」

緒花の言い通り、休日の昼過ぎだとゆうのを
映画館内はほとんど誰もいない。



「……ちよつと失礼しますよ。席そこなんです」

彼氏の前を横切り、そのまま緒花の隣の席に座る。
もちろん、横並びでチケットを取ったのも俺だ。

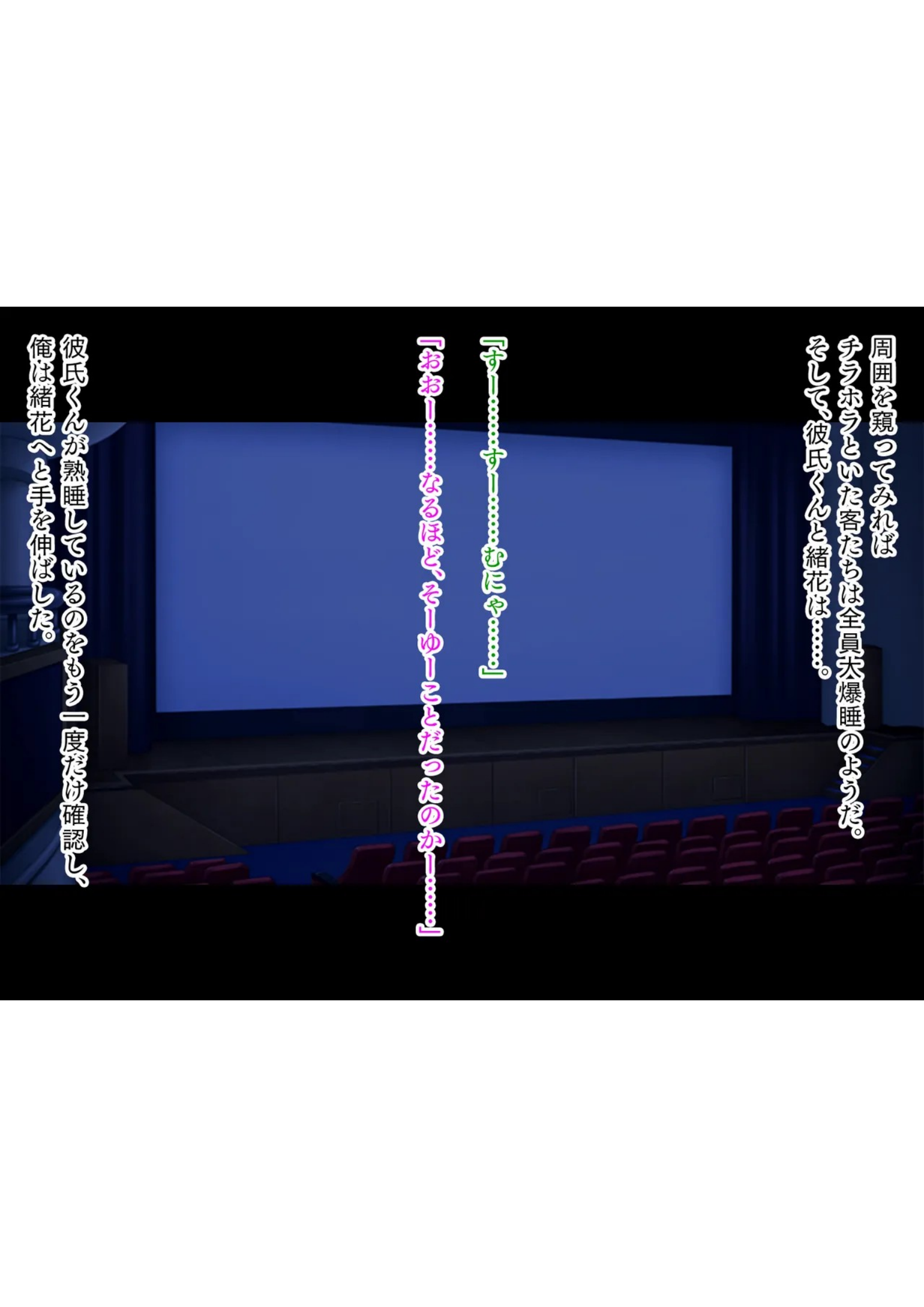
「楽しみだねー、どんな映画なんだろうっ」

「え？ 吾妹さんが観たくてチケット取ったんじゃないの？」

「あー、えーっとそうだったねー。あははー」

「え、えーと……あ、始まるみたいだよ」





周囲を窺ってみれば
チラホラといった客たちは全員大爆睡のようだ。
そして、彼氏ちゃんと緒花は……。

「すー……すー……むじや……」

「おおー……なるほど、そーゆーことだったのかー……」

彼氏くんが熟睡しているのをもう一度だけ確認し、
俺は緒花へと手を伸ばした。

「んむっ……れる、ちゅ……緒花、そろそろ始めるぞ」

「ぶほっ……マ、ママでやるの……？」

「んんっ……れる、ちゅっ……人、たくさんいるよ……っ」

「当たり前だ、そのために来たんだからな……ぴちゅ、れる」

緒花を抱き寄せ、その唇を奪う。

すき

ちゅ



「ほら、お前も触れよ……れる、ちゅ……
小悪魔ガールになりたいんだろ？」

「ちゅ……もうポツキしてるし……れる、ぴちや……
おにーちゃん、なんでそんなにへーきなわけ……？」

「なんだ、ガラにもなく緊張してるのか……？」



「あ、当たり前じゃん……れる、ちゅ……
ねえ、やっぱりやめよ……？ 帰ってからだしやうよ……」

「ふん、らりまるさう言ってられるかな……」

あゝ
あゝ

片手を動かして、緒花の背中側をまさぐる。



「あつ……！ も、もうつ……バカあつ……」

緒花の服を着崩させ、その乳房を露出させる。

「あつ……あつ……やだつ、
くすぐりたいつ……ふあつ……」

「んあつ……そんな触られかたしたら、
ゾクゾクッてくるつ……ふあつ……」

プルプルと揺れる乳房を指先でくすぐるたび、
緒花がピクンッと背中を反らす。



「ほら、らつもみたらたスツキリさせてくれよ……」

「う、うん……はあ、はあ……それじゃ、
ニコニコしてらんね……っ」



「チツ、余計な心配ばかりしやがって……」

まあいい、だったら気にならなくしてやるだけだ。



「おい緒花、口開けろ」

あ

ちゅんちゅん

おい

しゅん

ハロ……

わ

「んむうっ……!? また、いひなりっ……
れろ、ぴちやっ……んんうっ、んんうっ……」

「彼氏くんのことなんざ考えられなくしてやるよ……
ぴちや、れろ、ちゅるるっ……」

「んんうっ……
なんか、激ひっ……んんうっ……」



「んふあああつ……!? 乳首っ、らめえつ……
ふああつ……んむっ……じゅるっ……ふああり……」

「ダメと言いなながら
手コキが激しくなってきたぞ……?」

「らっへえっ……れる、ちゅっ……おにーひゃんがっ、
激しくすゆからっ……ふあっ、んんっ、ああっ……」

「緒花、もうそろそろ出すぞっ……」



「ひーよっ、きへえっ……じゅるっ、れるっ……
わらみの手っ、ザーメンでいっぱいにしへえっ……」
亀頭を重点的に、緒花の手が動き回る。

「ダメだ、出るっ……」

「ふぁっ、あっ、あぁあぁあぁ……
……わらひもり……
……らめっ……
……ふぁっ、あっ、あぁあぁあぁ……
……びぢぢぢぢぢ……」





「ふあああああああああああああああああああつ……！」

「~~~~~」

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

緒花はビクビクと身体を震わせながら、
小さく、絶頂の声をあげていく。

「おにーひゃんのっ、熱ひいっ……！
手がゾクゾクしてっ……
ふあっ、ふあああっ……！」

手の精液が当たる感触で感じているのか、
ゾクゾクとした震えを長引かせている緒花。



そうして、しばらく快感の波の翻弄され続け……。

「はぁー……はぁー……おにーひゃあん……
わらひ、これ欲しい……れろ、ぴちや……
アソコ、ムズムズすゆう……」

「うんのかあ……？ 彼氏くんが起きると、
見られるかもしれないぞお……」



「そんなの、るーれもらいからあ……れる、ちゅ……
エッチしょーよお……ちゅ、びちや……」

「まったく、仕方のないやつだなあ……」

「ほら、俺に跨がれ……ぐふふっ」

「はあ、はあ……うん……」

服を脱ぐ手間すらもどかしらとばかりに、
自らタイツをビリッと破き――。



「あつ、あああああつ……アソコっ、広がるうっ……!」

「おお、いい濡れ具合だっ……!」

ずぶっ

△ずぶッ

「おにーちゃん、動いてららら……っでゆーか、動くねえっ……」



「ああっ……ふあっ……カタイの、擦れるうっ……
あっ、ああっ……」

「ぐふふっ、いいぞお緒花あ……
好きなだけ楽しむといい」

「あっ、ああっ……気持ち、いらっ……ふあっ、ああっ……
奥まで、りっ、トメントンして居らるうっ……あっ、あっ……」



「あはあっ……っ はやくうっ……んっ、はあんっ……っ」

「じゃあ、俺はこっちを可愛がつてやるとしようか」

ケツの下に隠していたソレを取りだし、緒花の尻を弄って……



「ぐふふり、気持ちよそそうじゃないか」

だが、今回はここからが本番だ。

「いっそ緒花、スイッチ——ONだっ」





「ヤバいつ、これヤバいつてえっ……!!
あっ、んはああっ……!! お尻でブルブルしてっ……
アソコまで、震えてるうっ……んはああっ……!!」
「おにーちゃんっ、これすごらよおっ……!!
中でっ、ゴリゴリいつてるうっ……!!」

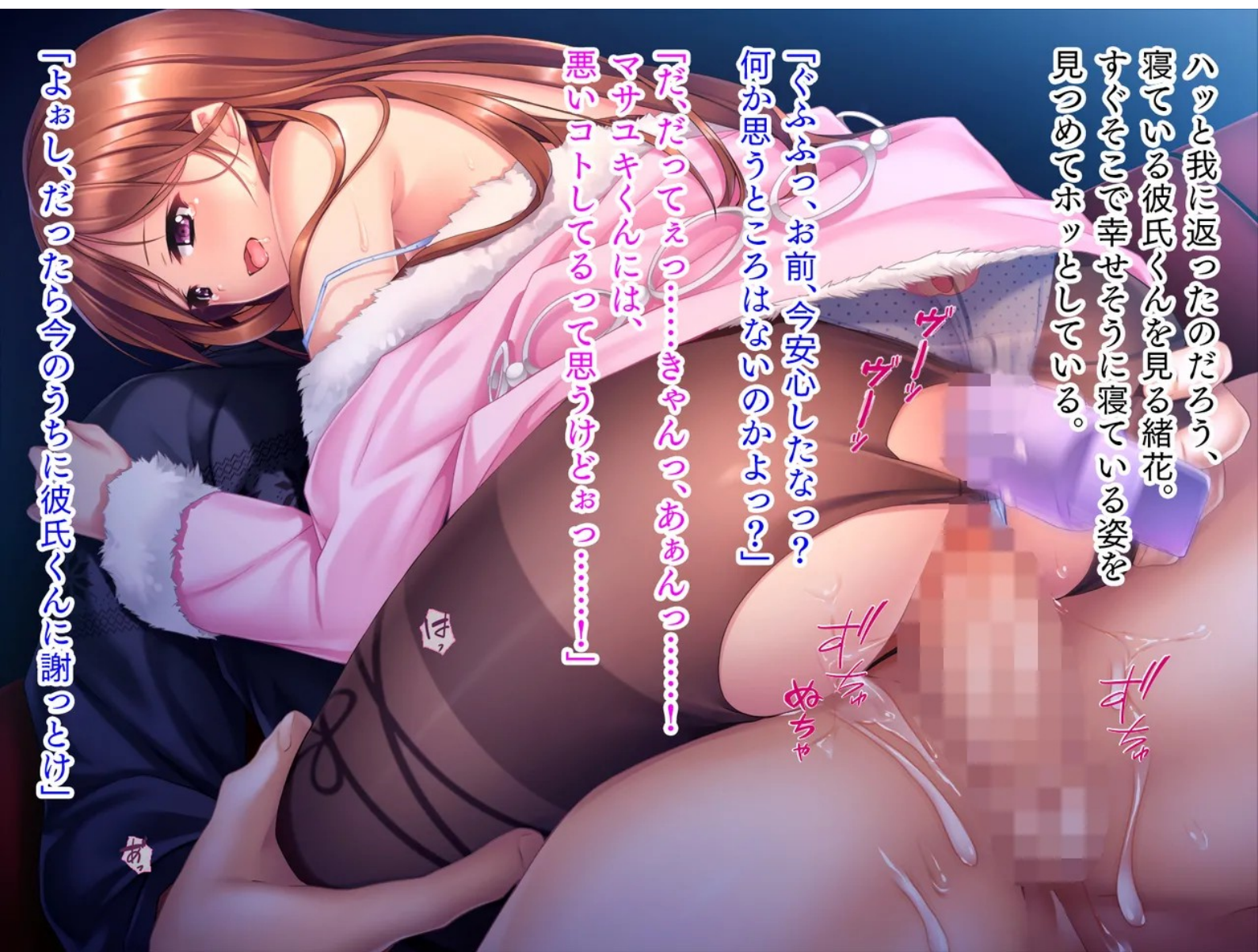
「おいおい、そんなに激しいとまずいぞ?」
優しい優しい彼氏くんが起きるんじやならぬのか?」

ハッ和我に返ったのだろう、
寝ている彼氏くんを見る緒花。
すぐそこで幸せそうに寝ている姿を
見つめてホッとしている。

「ぐふふっ、お前、今安心したなっ？
何か思うところはないのかよっ？」

「だ、だってえっ……きゃんっ、ああんっ……！！
マサユキくんには、
悪いコトしてるって思うけどおっ……！！」

「よおし、だったら今のうちに彼氏くんを謝りませ」



「でもわたしっ、やつぱりコレ好きなのおっ……!!
おにーちゃんどエッチするのっ、
やめられないのおっ……!!」

ガハハハハハ

ぬちゃ
ぬちゃ

おん
おん

あ

「だからっ、ごめんなさあいらっ……あんっ、ひあんっ……!!
わたしっ、マサユキくんのカノジョになれなくてっ、
ごめんなさあいらっ……!! きゃんっ、ああんっ……!!」

気分が乗ってきたところで、俺からも腰を動かしてっ。

「きゃあんっ!? あんっ、ああんっ、ひあんっ、
あっ、あああああんっ……………」

「くおおおっ! 締まるっ……………!?!」

ガザザザザ

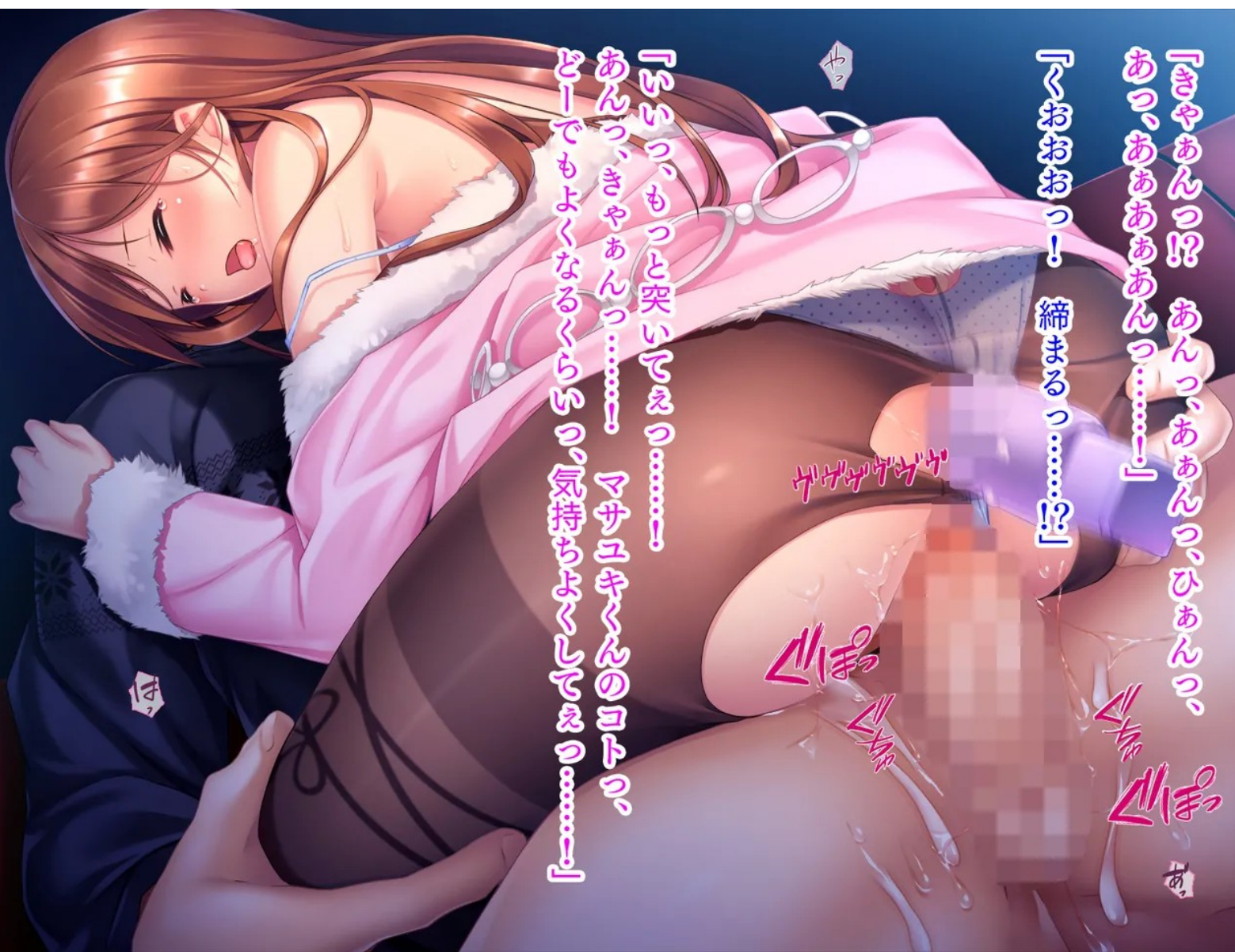
△△△

△△△

△△△
△△△

あ

「いっっ、もつと突いてえっ……………!
あんっ、きゃあんっ……………! マサユキくんのコトっ、
どーでもよくなるくらいつっ、気持ちよくしてえっ……………!」



「ひあああああつ……!!? うそおつ、なにっ、
これえつ……!!? あんっ、あああんっ……!!?
子宮っ、ブルブル震えてるううっ……!!?」

「ああんっ! しゅごっ、しゅごっ、
気持ちよすぎてっ、頭のなか壊れりゅうっ!
バカになっちやううっ!」



「あああつ、もうらめえつ！ イクツ、イツちやうううつ！
頭の中つ、おにーちゃんできっぱいになつちやうううつ！」

「イケっ！
好きなだけイツちまえ！」

「あああんっ!? イクツ、イクイクイクイクううつ！
あつ、あつ、あつ、あああああああつ……!!」





「ひあああああああああああああああつ……!!」

「~~~~~」

ビクッ!

ビクッ!

びるるる!

ああああ!

ビクッ!

おっ

「あっ、あああああ……！ 出てるっ……！
おにーちゃんザーメンっ、
子宮にビューッて当たってるよおっ……！」

「ああっ、まだ出るぞっ……！ くうううう……！」

すぐ隣に彼氏くんがいる状態で、
盛大な絶頂を迎える緒花。

ムムム
ムムム

ザーメンッ！

ムム
ムム

「はぁーっ……はぁーっ……♪
チヨォー気持ちよかったああ……♪」

「ああ、いいセックスだったな」

「ねえ、おにーちゃん……
まだ、映画終わらないんでしょお……？
だったらあ……このまま、もっかいしよお……♪」

「仕方ないなあ……そろそろくぞっ！」





ゆつくりと、緒花が尻を上下に動かしました。

眠っている彼氏のすぐ隣で行う背徳行為は、
映画が終了する直前まで何度も続いていくのだった……。

その後――。

「ほんつとにゴメン……せつかくの映画なのに、
ほとんど寝ちゃってたなんて……」

「ううん……気にしないでらふよ……」

映画館から駅へ向かうまでの道を、再び尾行していく。



「だから……また、」

「一緒に出かけたいなって思うんだけど、どうかなっ?」

「はあ、はあ……うん、うん……そーかもしれないね……」

膣内にはまだたっぷりのザーメンが残っているからな。
精液まみれの膣内にパイプで栓までされて、
刺激がほしくて仕方がないのだろう。

「あ、吾妹さん? 聞いている?」

「うん……そ、そう思う……」

「聞いてないみたいだね……はああ……」

彼氏くんにとって「二世」代の言葉だったのか、
ガクッと肩を落としている。

「はあ……帰るっか……」

「うん……そーだね……はあ、はあ……」





疼きが増しているのか、

もはや彼氏のほうを一瞥もしない緒花。

……まだまだ、緒花を他の男なんぞに渡さない。

兄妹である以上いつかは離れていくんだろうが、

それまではもっと楽しませてもらわなければ。

覚悟しろよ、緒花……ぐふっ！

寝取り猫コス主従プレイ

そして、それから一ヶ月ほど。

「にゃんっ……にゃあんっ……♪」

ぬちや……

んちや

は、

彼氏さんと緒花の恋人ごっこはまだ続いており……。もちろん、俺による寝取り風プレイも続けていた。





「おにーちゃん様とのセックスつ、
気持ちいいーにやあんっ……♪」

「おい、さっそく楽しんでないでまずは報告しろよ」

やっ

あ

んん

んん

「マサユキくんはあつ……んはつ、はあつ……
今日もつ、手を繋ごうとしてきましたにやあんつ……」

ぬちゃ…

ぬちゃ…

「そろそろキスくらいはしたいとかつ、
もっとデートしたいとかつ、
トモダチに言ってるらしいですよにやあんつ……」

「おい緒花、まさかキスくらいはと了承してないだらうな？」



「そんなコトっ、してないですよにゃあんっ……♪
わたしの身体はあつ、ぜんぶ、ぜんぶっ、
おにーちゃん様のモノですよにゃああつ……♪」

「報告っ、終わりですよにゃあんっ……♪」

「もうコイツは邪魔なだけだ。別れ話をしろ」

あ



「んっ、はあっ……マサユキくん、おつかれーっ……」

「わかりましたにやあん……んっ、はあっ……えーっど、ここをこうしてえーっ……」

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「……もしもし？ ……緒花ちゃん？
あのっ……今、そっち何やってるんだいっ？」

「なにつてっ、生ハメセックスだよおっ……？
おにー、じゃなくてご主人様とエッチしてるのおっ……♪」
「はあぁっ……!?!」



彼氏くん、混乱の極みといった様子だな。
仕方ない、俺が助けてやるか。

「やあマサユキくん、元気かな？
緒花と生ハメセックス中のご主人様……いや、
新しい彼氏とでも言ったほうが納得しやすいかなあ？」

「マサユキくん、わたしたち別れよお……
あんっ、ああんっ……エッチもキスも、
させてあげられなくてゴメンねえ……♪」



「わたしの身体つて
ぜーんぶご主人様のモノだからあつ……
マサユキくんには、あげなあーいっ……♪」

「おいおい緒花、それは言い過ぎだろ？」

「っ……………」





「きゃあんっ?! やつと激しいのきたあつ!
生ハメ気持ちいいよおつ!」

「ひあああんっ?! それっ、それダメえつ!
お尻もいっしょに気持ちよくされるのっ、ダメなのおつ!」

ズズッ!
ズズッ!

「ほら、マサユキくんにも聞こえるように、
しっかり言い直すんだっ!」

「きもちいいっ、にやあんっ！
エッチ大好きな淫乱ネコ緒花のアソコおっ、
ご主人様の生ハメセックスで喜んでますにやあんっ！」

「聞こえるかいマサユキくんっ！
君の大好きな緒花はねえ、
こんなにエロい女の子なんだよっ！」



「ほしいっ！ 中出しほしいにやあんっ！
ご主人様の濃厚ザーメンでえっ、
イカせてほしいにやああんっ！」

「びくぞっ！ 大量にぶち撒けてやるっ！」

「きてっ、きてええっ！ 中出しっ、中出しっ！
ご主人様の濃厚ザーメンっ、
いっぱい出してくださいにやああんっ！」





「にゃはあああああああああああんっ!!」

おあおあ!

びりびり

びりびり!!

びり

「にやっ、にやああああんっ！ 出てるうっ！
濃厚ザーメンうっ！ 緒花のアソコっ、
いっぱいにしてるにやああっ！」

ふあきき

「ぐふふっ、ほおら彼氏くんっ！ 聞こえるだろうっ？
緒花が中出してイッてるよおっ！」





——さて、これで彼氏くんとは別れたわけだが。
次は何をして遊ぼうかな。
ああ、考えるだけで楽しみだ……!!

くおしまらっ